

天智天皇と鏡王女の贈答歌について

鉄 野 昌 弘

天皇賜^二鏡王女^一御歌一首

妹之家毛^{いもが いへも} 繼^{つぎて}而^み見^{まし}思^を乎^{やまと} 山跡有^{おほしまのねに} 大嶋嶺^{いへも}爾^{あらまし} 家母有^{いへも}媛尾^{あらまし}

一云 妹之當^{いもがあたり}繼^{つぎて}而^み毛^み見^む武^に 一云 家居^{いへを}麻^{まし}之^を乎^を

(万葉集卷二・九二)

鏡王女奉^レ和御歌一首

秋山之^{あきやまの} 樹下^{このした}隱^{がくり} 逝水^{ゆくみづの}乃^の 吾許^{われこ}曾^そ益^{まさ}目^め 御念^{おもはず}從^{より}者^は

(同・九二)

*

天智天皇と鏡王女による上掲の二首は、万葉の相聞歌の初発に位置づけられる贈答歌であるが、ともにその解釈に様々な問題を抱えている。贈答歌であるために、二首は、一方の問題が、他方の解釈にも影響せざるを得ない関係にある。と言うより、この二首は、その関係の仕方自体に議論が残されている状態なのである。その問題は、まずは鏡王女の歌が、天智天皇の歌に、いかに応じ

ているかという形で論ぜられる。しかし同時にそれは、応じられる天智の歌をも問うことに他ならないはずである。

本稿では、この二首にまつわる諸問題を、出来るだけ関連づけつつ考えてみたい。解釈の検討を通じて、この二首のあり方を見定めることが出来れば、相聞歌の歴史を考えてゆく上でも、意義は少なくないと思える。

一

鏡王女の歌の表現から確かめてゆきたい。まずこの歌の上三句の序詞が、本旨とどのような関係にあるのが問題になる。

青木周平^{注1}氏は、鏡王女歌の序詞に関して、「秋に増水するから第四句の『益さめ』にかかる」とする通説を、「序詞の景の表現を越えた解釈」として批判する。序詞に述べられる視覚的な景全体を直下の「われ」が受けるのであり、「隠れ流れる水」に「忍

ぶ恋をするわれ」が同化するのだと言うのである。^{注2}

氏は、上代における「行く水の」の比喩及び序詞としてのかかり方を検討し、1「へ時間」を象徴するもの、2「音（聴覚）」と結びつくもの、3「へ水の形状」を表す、長歌に見えるもの」の三群に分けた上で、

一、「行く水の」は、直下の表現にかかる。

二、鏡王女歌に「へ時間性」「へ聴覚」と結びつく表現性はない。

三、鏡王女歌の序詞は、「へ視覚」による景の表現である。

四、「秋山」には「下檜山」のイメージがある。

五、鏡王女歌の序詞中から、増水のイメージは導き出せない。

として、「序詞の景全体を『われ』がうける」と結論する。

しかし、この内二、三、四、などは一応認められるにしても、

一、五、には問題があるう。

「行く水の」のように、内部に主述関係を持つ序詞は、下に述べられる本旨（通常は人事に関すること）に対して、比喩の形でかかってゆくのが普通と考えられる。

青木氏の言う1「へ時間」を象徴するもの、例えば

飛鳥川みなぎらひつつ行く水の間もなくも思はゆるかも

（紀歌謡一一八、齊明天皇）

巻向の痛足の川ゆ行く水の絶ゆることなくまたかへり見む

（7・一一〇〇、人麻呂歌集）

潮気立つ荒磯にはあれど行く水の過ぎにし妹が形見とそ来し

（9・一七九七、同）

などにおいては、「行く水の」が、下の「間もなく」「絶ゆることなく」「過ぎ」などを「つなぎことば」^{注3}として、それぞれ「吾の思いの間のないこと」「自分が振り返ることの絶えないこと」「妹が過ぎてしまったこと」の比喩として機能する。

一方2の中の、

しなが鳥猪名山響^{とよ}に行く水の名のみ縁^よさえし隠妻はも

（11・二七〇八）

奥山の木の葉隠りて行く水の音聞きしより常忘らえず

（11・二七一一）

などでは、1の「行く水の間もなく」「行く水の絶ゆることなく」のように、序詞がつなぎことばと主述関係で続くのではなく、「名」或いは「音」といった体言を起こす形になっている。しかしこの場合も、上三句の序詞が、世間の噂（「名」）が喧しいこと、評判（「音」）だけが伝わってくることを比喩する点では、1の例と相違があるわけではない。

同時に、「名」にとって喧しいこと、或いは「音」にとって実体から離れて聞こえることは、それらの本来持つ属性であって、

序詞はその属性を取り出して強調するに過ぎない。その点で、これらの序詞の比喩関係は、同じく直下の体言にかかっているようにも、青木氏が想定するような、鏡王女歌における上三句と「吾」との関係とは異なる。「吾」のとき代名詞が、無限定なままで序詞を受け、比喩される、といった例は、「行く水の」を離れても、他に見出しがたいと言わねばならない。^{注4}

3に分類される長歌の二例は、最も当該歌の参考にすべき例であろう。

…下檜山下行く水の上に出でずわが思ふ情安からぬかも

(9・一七九二、福麻呂歌集)

…射水河雪消溢りて逝く水のいやましにのみ鶴が鳴く奈呉江の音のねもころに思ひ結ばれ嘆きつつ吾が待つ君が…

(18・四一一六、家持)

(一七九二)では、「したひ山」(もみぢする山)に同音の関係で起こされた「した行く水の」が、「上に出でず」をつなぎことばとして、表情に出さないで「思ふ」ことの比喩として働く。この歌と当該歌とは、序詞に表現される景をほぼ相等しくする。この例にならって、鏡王女もまた、「御念」に勝る自らの思いを、「秋山の木の下隠り行く水の」によって、ひそやかで目立たないものに形象したと考えるのが穏やかである。

一方(四一一六)では、雪が消えて流れが次第に増水するさまが、「君」を恋しく思う情がますますつのって行くことを比喩している。「いやましに」がつなぎことばとなって、「行く水の」から心象へと転換し、思いの比喩表現として働くのである。これからすれば、当該歌の序詞も、第四句の「益す」をつなぎことばとすると見て不都合ではないだろう。

青木氏は、秋に増水するから「益さめ」に続くとする説を、序詞の景の表現を超えた解釈として批判するけれども、

朝露にほひ染めたる秋山にしぐれな降りそありわたるがね

(10・二二七九、人麻呂歌集)

などを挙げるまでもなく、「秋山」や黄葉にしぐれはつきものであり、必ずしも無理な拡張とは言えまい。或いは雨に拘泥せずとも、川が次第に流れを集めて水量を増すことを捉えたと考えて、当該歌の序詞が「益す」に続くとは可能だろう。

当該歌の序詞の部分と、つなぎことば「益す」とが離れている点は、その間に主述関係を構成するものの中でも、確かに例外的である。しかし、集中には、

唐人の衣染むといふ紫の情に染みて思ほ・るかも

(4・五六八、麻田陽春)

紫の名高の浦の靡き藻の情は妹に依りにしものを

など、上三句までの序詞が、直下ではない箇所にあるつなぎことばと主述関係を持つ類例が、僅かながら存在する。これもまた通説を否定する根拠とはなしない。

結局、上三句の序詞は、「益す」をつなぎことばとして下の「吾こそ益さめ」に転じる、とする通説で十分解釈しうる。黄葉する木々の下に隠れつつ、増水してゆく川の流れによって、表面に現われることなく、ついつつゆく吾が思いを比喩的に表現しているのである。序詞の景と「われ」が同化する、と青木氏が言うのは、水が「益す」ことと、思いが「益す」こととの同化までを含んでそうなのだとするべきである。

以上、長きにわたって、青木氏の主張を論う形で、当該歌の序詞に対する通説を確かめてきたのは、無論、その先に問題が存在するからである。それは、下二句の本旨「吾こそ益さめ御念よりは」の内部では、「益す」に対する上述のような解釈が成り立ちがたい、という点にある。この部分のみを見るならば、「益す」は増益する意ではなく、「御念」に優越する意でなければならぬ。青木氏も、当然この点を重く見て、序詞部分にも増水のイメージがないとしたのであろう。

内田光彦氏は、従来上三句を「下思ひ」の比喩、「益す」の序詞

とする二つの見方があり、現行の諸注は、多くそれを折衷した形で説いている、と言う。それは、単に「益す」の序と見ると「木の下隠り」が適切な表現とは言えなくなり、「吾こそ」も夾雑物めいてくるし、逆に「下思ひ」の比喩とすれば、「益す」が唐突な感じになって、処置に窮するからだ、と内田氏は説く。換言すれば、これは、序詞のつなぎことばとしての「益す」と、本旨の中の「益す」との意味上のずれ、ひいては、それによる序詞と本旨との間の微妙な印象のずれを指摘したものと見えよう。

従来の多くの注が、それを意識的・無意識的に曖昧にしてきたのは、序詞からでも本旨の中でも、動詞益すに変わりはないからであろう。しかしここは、最近の新編日本古典文学全集本が、「このマスはマサルに同じ。序からは増加の意で受け、第五句へは数量や程度の比較を表す意で続く。」と明確に述べるのに従うべきである。『時代別国語大辞典』上代篇が「①数量的に増加する。ふえる。」(例「ふる雪のふりは益とも地に落とめやも」6・一〇一〇)、「②優越する。すぐれる。」(例「価無き宝といふとも一坏の濁れる酒にあに益めやも」3・三四五)と分けるように、動詞益すは、既にこの二つの意義を分化させていた。当該歌の「益す」は、単につなぎことばとして物象から人事へと転換する役割を担うのみならず、意義分化して持った、増益と優越という二つ

の意義を、その内部で交替させているのである。

その交替が、一首の中のずれを生んでいるとすれば、一首はまさにそのようなずれを胎んだ歌として受け取らなくてはならないだろう。この単線的な理解を許さない、ねじれた文脈のあり方は、例えば

梓弓弦緒取りはけ引く人は後の心を知る人ぞ引く

(2・九九、久米禪師)

といった初期万葉歌を思わせる。文脈の進行とともに、一つの言葉の意味合いが変化して行くのは、この時期の口誦歌に特有の現象と見られよう。

しかし、序詞から「益す」にかかる文脈も、下二句の本旨の文脈も、それ自体では完結している。上述の転換が、無意識の誤り・破格といったようなものでないことは確かだろう。序詞とつながることば「益す」との間に、「吾こそ」という排他的に自己を主張する語句を挿入することが、意義の転換の契機となっている。この序詞の例外的な形式は、それが鏡王女による意図的な仕掛けであることを示すだろう。語義の転換によって、故意に文脈をねじり、複線化することが、この歌の口誦歌的方法としてあったと捉えるべきだと考える。

かかる方法によって、鏡王女は、天智の歌に対して、いかに応

じようとしているのだろうか。

二

二首の関係が問題になるのは、万葉の相聞歌、或いは記紀歌謡の男女のやりとり、顯著に認められる詞句の共有が、この贈答には見出しにくいことに原因がある。即ち、初期万葉から挙例すれば、

玉匣覆ふを安み明けて去なば君が名はあれど吾が名し惜しも

(2・九三、鏡王女)

玉匣三諸の山のさな葛さ寐ずは遂に有りかつましじ

(同・九四、藤原鎌足)

の贈答における「玉匣」や、

玉葛実成らぬ樹には千磐破神そ著くといふ成らぬ樹ごとに

(同・一〇一、大伴安麻呂)

玉葛花のみ開きて成らざるは誰が恋ならめ吾は恋ひ念ふを

(同・一〇二、巨勢郎女)

の「玉葛」など、また歌謡でも、

八田の一本菅は子持たず立ちか荒れなむ、あたらず菅原、言をこそ菅原と言はめ、あたらず清し女

(仁徳記歌謡・六四)

八田の一本菅は独り居りとも、大君しよしと聞こさば独り居り

とも

(同・六五)

の「八田の一本菅」のように、一般に、贈歌に具体的事物が歌い込まれ、それを利用しつつ、答歌が切り返す、という関係が成り立つのであるが、この二首にはそれに相当するものが見当らないのである。

これに関して、寺川真知^{注6}氏は、天智歌が、土橋寛^{注7}氏の所謂「国見的望郷歌」の範疇に属することを説き、「大島の嶺」から鏡王女の家を常に遠望することを願ったものであると言う。これに対して、鏡王女は、山の上から見たのではわからない、「秋山の木の下隠」る水に、自分の密やかにして激しい思いを託することに応じたのだと説くのである。

青木周平^{注8}氏も、天智歌が「国見的望郷歌」に類するとして、「大島の嶺」には賛美の感情が含まれると述べる。そして鏡王女歌に歌われる、賞美されるべき「秋山」こそ、天智歌に賛美された「大島の嶺」なのであるとし、へ妹が家―大島の嶺―秋山―われ」という、「隠された呼応関係」を想定するのである。

両氏の論は、ともに天智歌に「国見的望郷歌」としての性格を認めると同時に、「大島の嶺」と「秋山」とが、二首の直接の接点となることを説く点でも共通している。^{注9}しかし「大島の嶺」と「秋山」とは、同語でないのは無論のこと、固有名詞と一般名詞

という相違を持っている。更に、前掲の贈答群において、「玉匣」が三輪山伝説を背景にしつつ「御諸山」を導きだしたり、^{注10}「玉葛」が「花のみ咲きて成らざる」という卓抜な比喻を形づくるといったように、共有される詞句が、答歌の要諦をなしているのと比較した場合、「大島の嶺」を「秋山」として受けるとしても、鏡王女歌にとって必ずしも有効に働いているとは言いがたい。阿蘇瑞枝^{注13}氏は、言葉として直接応じていないところに、なお事物による呼応を求めるのであるが、そうした試みには無理があると言ざるを得ない。

かかる贈答の繋がり不明確さゆえに、鏡王女歌が、天智歌を、全体としてどう迎えているのかに議論が残るのである。

橋本四郎^{注11}氏は、鏡王女歌に、古代歌謡のかけ合いに見られる挑戦と反撃の姿勢を認める。第四句「こそめ」の型を用いていることに、口で愛情を告白しながら逢いに来てくれない相手への非難と、女であるゆえにひたすら待たざるを得ない嘆きを見るのである。「吾こそ」「念ほす」という対比の形式を取るのは、相手の歌もまた、姿を見せぬ妹を恨む歌であるを取りなしているため、そこには相手の歌意の転換という贈答歌の特色が成立していると言^{注12}う。

これに対し、阿蘇瑞枝^{注13}氏は、天智歌の「単純明快、すこしの翳

りもない」のに対し、鏡王女歌は「写實的・こまやか・ひそやか」で、茂吉『秀歌』の言うように「つつましい」歌であると言う。声調も違い、語句も共有しない点で、この贈答は例外的である。答歌はひたすら天皇に対する自分の思いの深さを訴えたものであって、わざと相手の思いをおとしめて、挑戦や反撃をしているなどとは考えがたいとして、橋本説を批判するのである。

確かに前掲の初期万葉や歌謡の答歌ほど、鏡王女歌に切り返しや挑戦の口吻はあらわでない。それは、天智歌が、前掲の男の歌のような、からかいや脅迫といった攻撃性を持たないのに対応しているだろう。『全注』（稲岡耕二氏）は、鏡王女が舒明皇女であった可能性に触れ、兄妹間の親密な贈答であったと想定している。^{注14} 少なくとも、求婚の際の歌に見られるような、歯に絹着せぬ表現とは異質であることは疑いない。

しかしたとえ実際に恋愛感情を伴わなかったとしても、その親密さを表現しようとすれば、天智歌がそうであるように、自ずと恋歌の如く仕立てられるであろう。その場合、答歌には、ある程度の張り合いの姿勢が必要であったと考えられる。「吾こそ益さめ、念ほすよりは」と、あえて相手と自分の思いの丈に優劣をつけるのには、やはり単なる同調・唱和に止まらない語気がある。特に前節に見たような技巧を用いて、それを強調するところ

に、鏡王女の態度を見るべきである。その点、橋本論の方向もまた否定しがたいと考える。

この歌は、目立たず、控えめな自らの情が、相手の思いに優るものとして、高く述べたてられるという、まことに逆説的な状況を作り出している。それを可能にしているのが、前節に見たような「益す」の語義転換という芸当なのである。その逆説は、

玉葛花のみ咲きて成らざるは誰が恋ならめ吾は恋ひ思ふを

（2・一〇二、前掲）

水薦刈る信濃の真弓引かずして弦はくる行事を知るといはなくに

（2・九七、石川郎女）

梓弓引かばまにまに寄らめども後の心を知りかてぬかも

（同・九八）

といった、初期万葉の女歌の、相手の不実や弱気に自分の誠実・明確な思いを対置し、相手をなじりながら慕い寄って行く、という裏腹な態度に通じていよう。しかも内向的な表現の下に、相手への批評を滑り込ませる点、機微の複雑さで数等優っている。自分を恋しく思うと歌った尊貴な相手に対する礼を失することなく、深い思いをもって答え、かつ多少の揶揄を交えて不足を述べ、更なる好意を引き出さねばならない。かかるそれ自体逆説的で困難な課題が、鏡王女にそうした表現を選ばせているのだろう。

それにしても、二首の脈絡の問題は、依然として残る。

橋本氏は、二首を「内面的贈答」と規定する。相手との信頼関係の確かさを背景にして、相手の親愛の情をわざと軽んじて見せるという、氏の説く「内面的」機制は、十分に理解しうる。また天智歌を「姿を見せぬ妹を恨む歌」ととりなすが、その対抗の姿勢を作り出しているという理解も、基本的に正しいと考える。しかし氏の言うように、そこに鏡王女の「全く個人的な解釈を通じた贈歌の歌意の転換」があったとすれば、その「とりなし」は、やはり贈歌の具体的な表現に基づいて行なわれたのではないか。またそれに即して説明されるべきではないだろうか。^{注15}

鈴木日出男氏は^{注16}、万葉第三期を境に、相聞歌は、社交性・挨拶性が強まり、心情・人事を表す語句だけによる贈答歌を増大させるという変化を遂げると言う。そこでは観念化し、誇張された表現が用いられるとともに、その誇張が諧謔的にのみならず、批評的にも捉えられるようになって、遂に恋愛自体に否定的な悲哀の表現につながってゆく、と鈴木氏は説く。

贈歌の発想自体を捉えて、切り返す、という、橋本氏の所謂「内面」にのみ依存するような答歌のあり方は、この位相において初めて可能なのではないかと考える。万葉相聞歌の初期の贈答として、当面の二首には、切り返しを成り立たしめるような、

具体的な言葉による繋がりがやはり期待されるのである。

三

歌の贈答において、答歌は、贈歌の言葉を捉え、それを変換して、自分の文脈に織り込むことで、切り返すのが常である。その言葉は普通、囑目或いは即境的景物であって、^{注17}その共有が、贈答の繋がりを保証するのである。しかし初期万葉歌では、それと並んで、言葉の音声的側面が、変換のコードとして働いていた可能性はないだろうか。観念化を経る以前の初期万葉歌の言葉は、言わば一つ一つの音の響きと一体にあって、その音を通じて多様な連想のネットワークを作っていたように思われる。先に見た鏡王女歌の方法も、多義的に生動する言葉を束ねてのものであった。当面の二首に、物象による意味的関連が希薄であるとするれば、そうした音声上の繋がりが検討されてよいと考える。

先に見たように、鏡王女の歌のポイントは、序詞によって引き出された「益す」にある。それは、下二句の本旨の中で、意味を転換させられるのであり、その転換の契機となるのが、序詞との間に挿み込まれた「吾こそ」であった。

「吾こそ益さめ」という言い回しは、橋本氏の言うように、「逆接的氣息」を持っている。要するに、それは、「益す」のは、自

分であつて、あなたではない、といった言い方なのだろう。それは、裏を返せば、あなたは自分がマスとおっしゃるけれども、といった意味合いを含んでいのではないだろうか。

つまり、「吾こそマサめ」とは、天智の歌に反復されるマシを捉えた物言いであつたと解してみたいのである。「益す」の意義転換も、そもそもその言葉が、相手の歌の言葉尻を交換したものだということに根拠づけられ、またそこから発想されたものではなかつたか。

かかる見方が可能かどうか、他の例を検討してみよう。

一首の歌の中で、同音・類音の別語に転換する例であれば、当然のことながら、ごく一般的に見ることが出来る。例えば、

処女^{をとめ}らが袖ふる山の瑞垣^{みづがき}の久しき時ゆ憶^{おも}ひき吾は

(4・五〇一、人麻呂)

のような掛詞式(振る・布留)に転換する序詞、また

玉匣御諸の山のさな葛^{くず}さ寝^ねずは遂にありかつましじ

(藤原鎌足、前掲)

のような同音・類音反復式の序詞は、いずれもそのような転換を利用したものである。また歌謡の中では、

八田の一本菅は子持たず立ちか荒れなむ、あたら菅原、言をこそ菅原と言はめ、あたら清し女 (記歌謡六四、前掲)

の如く、対比される言葉同士が、同音・類音関係にある例も見られる。

応酬される歌の中で、音的契機の働く例としては、清寧記の平群の志毘^{しび}臣と袁祁命^{えんけい}の歌垣でのやりとりを挙げ得るだろう。

まず志毘の

大宮の彼つ端手隅^{はたで}傾けり

(記一〇五)

に対する末として袁祁命の歌う、

大匠^{おほ}をぢなみこそ隅傾けれ

は、意味上の切り返しというよりは、むしろ句頭の音を相手に揃えて返答したところに袁祁命の面目があるのだろう。

続く応酬には、宣長以来、この配列を疑い、武烈紀の所伝と見合わせながら原形を再構成することが試みられている。^{注18}

王の心を緩み臣の子の八重の柴垣入り立たずあり

(二〇七、志毘)

潮瀬^{なみ}の波折^{なみ}りを見れば遊び来る鰯^{しほ}が鰯手^{はたで}に妻立てり見ゆ

(二〇八、袁祁命)

大君の王子の柴垣^{やふじま}八節^{やふじま}結び廻^{もとは}し切れむ柴垣焼けむ柴垣

(二〇九、志毘)

大魚^{おほなま}よし鰯^{しほ}突く海人^{うみ}よ其があれば心恋しけむ鰯^{しほ}突く鰯

(二一〇、袁祁命)

しかしこのやりとりに関しては、このままの形で内田賢徳氏の^{注19}理解に共感される。志毘が「大宮」の縁で「柴垣」を歌って憎まれ口をたたく(一〇七)のに対し、袁祁がそのシバを、相手の名前シビに変換してしまい、正面から応じないことで、志毘をはぐらかす(一〇八)。怒った志毘が、さらにシバを三度たたみかける(一〇九)のを、袁祁は、シビを三度繰り返すことで、軽くないなしてしまふ(一一〇)、と言うのである。

少なくとも、(一〇八)の「鮪がハタデ」が、志毘の(一〇五)の「大宮の彼つハタデ」を承け、同音異義語に変換して、相手の名をからかう材料にしているのは明らかである。

この場合、シバ垣・シビ・ハタデなどは、いずれも名詞であり、しかも相手の名であるシビを始め、おおよそ即境的な言葉と見てよいものである。従って、動詞「益す」を、助動詞「まし」に応じたものという私見の傍証に、ただちになるわけではない。しかし「サナ葛―サ寝」(九四)といった例に照らして、品詞の一致が必ずしも絶対ではないとも言えよう。それよりも、相手の歌詞を、わざと同音・類音の別語に変換して歌い返すことが、答歌の反発の一つの形式としてあることに注目したい。

この歌謡物語が、記の編集段階において構成されたものだとし、ても、これらの音声の対応による切り返しには、歌垣のような口

誦の場における論理が伝えられていると見てよいと思われる。

初期万葉や記紀歌謡といった口誦世界では、なお多様な音声的対応と意味変換の形式が存在しえたのではなからうか。その中で、鏡王女の「マシーマス」の変換を想定することも、不可能ではないと思うのである。

四

それでは、天智の歌はどのように解されるのだろうか。

この歌では、周知のように、「大和なる大島の嶺」にあればよいと歌われる「家」が、妹の家なのか(A)、自分の家なのか(B)に、議論が集中している。^{注20}

それは、「大島の嶺」の所在も、また天智が、いつどのような状況で作歌したかも、全くわからないこととも関係する。A説によれば、天智は「大島の嶺」の見える場所に居住し、鏡王女は、天智の居所から遠く離れていることになる。一方、B説では、鏡王女は「大島の嶺」から見下ろされる場所に在住で、天智は、大和以外の場所に住んでいることになる。

「近江大津宮御宇天皇代」という標目、「天皇賜鏡王女歌」という題詞からすれば、厳密に言えば天智七年正月即位後、少々広く見ても六年の近江遷都後の作でなければならぬ。それならば天

皇は近江にいたのであって、B説が有力ということになる。しかし次の鎌足と鏡王女の婚いの贈答（九三・九四、前掲）は、おそらく天智朝のものではないだろう。^{注21} 当該歌が天皇の歌として載せられているのは、各天皇代の冒頭を天皇や皇后・皇子の歌で飾るという巻の編纂原理による可能性も考えられる。従って、天智朝の標目下にあっても、必ずしもその間の作品とは限定出来ないのである。そこで現在A説をとる諸注は、天智が皇太子として難波宮にあった頃（大化元々白雉四年）の作歌を想定し、「大島の嶺」を河内・大和境の生駒・信貴の山々に比定している。^{注22}

さてA説は、当該歌の反復形式を重視する。山田『講義』は、上二句と下三句とは、同様のことを繰り返しているものであり、両方に出てくる「家」が異なる家を指すはずはない、として、ともに「妹が家」と見るべきことを提唱したのである。

また沢瀉久孝氏^{注23}は、

吾はもや安見兒得たり皆人の得かてにすといふ安見兒得たり

（2・九五、藤原鎌足）

あさもよし紀人羨しも亦打山行き来と見らむ紀人羨しも

（1・五五、調淡海）

など、反復形式の類例を挙げ、繰り返し現われる語が、同意であることを確かめている。注記から復元される異伝

妹があたり継ぎても見むに大和なる大島の嶺に家居らましを
は、本文歌と構造を異にしており、「見む」と「家居らましを」とは同一主体の動作でなければならない。従って異伝は、作者が大島の嶺の上に住んで「妹があたり」を見たい、の意に他ならない。しかし本文歌はあくまで繰り返しであって、「家」はともに「妹が家」と見るべきであると沢瀉氏は言う。

これに対して、B説に立つ土橋寛氏^{注24}は、「上二句の意味と下三句の意味が同じ意味を表わすという点から言えば、『家』は作者の家であっても相手の家であっても差支えなく、第五句が第一句の繰返しでない以上、『妹が家』でなければならぬとは言えない。」として山田・沢瀉説を批判する。

確かに沢瀉氏の挙げた他の例は、ほとんどが土橋氏の所謂「脚韻式繰返し」の歌である。上二句ではワレが主語であり、下三句では「家」が主語となる当該本文歌とは、必ずしも同一視できない。また反復といっても、土橋氏^{注25}の言うように、主題・説明の型なのであって、いずれの場合も、全く同じことをただ繰り返したのではないことは言うまでもない。当該歌の場合、「妹が家を見る」ことを、「山の上に家があつて、そこから見る」ことに言い換えた、と解する可能性も、検討されねばなるまい。

しかし、それではB説の方が正しいと言えるだろうか。

土橋氏は、この歌を「国見の望郷歌・恋歌」の発想に基づくとして、次のように言う。

そこから「妹があたり」「妹が家」を「継ぎて見ましを」という表現が生まれてくるのである。従って、皇女の家近くにあり「大和なる大島の嶺」から「妹が家」を望見したいという意味であることは明らかである。（中略）この歌は、難波に住む中大兄皇子が、大和に住む王女に贈る歌であるから、発想の方は同じでも、歌としての具体的な形は違って来る。「妹が家も継ぎて見ましを」という変化はそのためであり、「継ぎて見る」ために、自分の家が山の上にあつたらしいのに、という着想が生まれてくるわけである。

これは、明らかに異伝と本文を、アプリアリに同一視した議論と言わねばならない。本文歌と異伝とは、二段形式になっているか否か以外にも、大きく相違する部分がある。それは、初句「妹が家も」が、異伝では「妹があたり」となっている点である。

土橋氏が、「国見の望郷歌」の発想に基づく歌として挙げる、飛ぶ鳥の明日香の里を置いて去なば君が当は見えずかもあらむ 一云君が当を見ずてもあらむ （1・七八、元明）
秋山に落つる黄葉しましくはな散り乱ひそ妹が当見む

（2・一三七、人麻呂）

妹が当吾が袖振らむ木の間より出で来る月に雲なたなびき

（7・一〇八五）

などには、いずれも「妹（君）があたり」という表現が含まれている。土橋氏は、これを『妹が家』と一云の『妹があたり』を比べてみると、後者の方は、国見の望郷歌の慣用語であるだけに、鏡王女に贈る歌としては、ピンと外れになるところから、的確に『妹が家』としたものであろう。」と説明する。

土橋氏の言う「国見の望郷歌・恋歌」は、元来「高い山から：見れば」という型を国見歌と共有するところから、春山入りのような国見行事の場で、国見歌とともに歌われたとされたものである。従って、本来集団に信仰される特定の山を場とするはずであるが、記紀歌謡も含め、土橋氏の認定する「国見の望郷歌・恋歌」の中に、確実にそうした場を持つと言える歌が存するかどうかが危ぶまれる。まして明らかに場を異にする、前掲の三首や当該歌の如き歌を、「国見的」と呼ぶこと自体躊躇される。

もっとも高所から故郷や恋人のいる場所を望む望郷歌・恋歌の類型は、確かに存在する。しかしその類型は、「あたり」という語を持つことが特徴であり、土橋氏も、その語を認定の指標としているとおぼしい。それを「あたり」の語を含まない本文歌にまで拡張して、同じ発想に基づくと見られるだろうか。当該歌を

国見的望郷歌」のバリエーションと見ることは、前述のように、寺川氏や青木氏も認めるところだが、問題なしとしない。

むしろ本文が、「妹があたり」という「慣用語」を用いない点に、異伝とは異なる発想を認めるべきではないか。

「あたり」という語を用いる望郷歌・恋歌は、「妹（君）があたり」をまさに「あたり」として見ることを歌う。つまり対象を「あたり」としてしか把握出来ない、遙かな地点において、なおも視覚空間を共有することに慰めを感じ（前掲一〇七五）、或いはそれを失うことを嘆き（七八）、またそうすることを求める（一三八）表現と言えよう。

対して「妹が家」を見ユ・見ルと歌う例はごく稀であるが、

遠くありて雲居に所見妹家（みづゐるいもがいえ）に早く至らむ歩め黒駒

（7・一二七、人麻呂歌集）

を見出だしうる。この歌では、「雲居に見ゆる」と同時にこれから「至」ろうとする目標である故に、「妹が家」でなければならぬのだろう。「妹が家」が見える、或いは見る、というのは、その固有の一点を視認しようとする表現なのではなからうか。当該本文歌の場合、「妹があたり」でなく「妹が家」であるのは、自分のところから見える山に、一つだけ「妹が家」を移して見る、という発想であったことを示すと考えられる。^{注26} 結論として、A説

の方に蓋然性が高く、「家もあらましを」の家も、「妹が家」であると考えるのである。^{注27}

更に、反復される「…モマシヲ」という表現によっても、その見方が補強される。

本文歌は、反実仮想によって現実のままならなさを繰り返して嘆く。「妹が家毛」「家母あらましを」のモは、添加（大島の嶺に加えて）とする注（窪田『評釈』・『全注』など）もあるが、「希求や反実仮想的表現の中にあつては、せめてだけでも、という気持を表す。」（全集本）とするのが正しいだろう。^{注28}「同じ群に属するもの全体の暗示のもとに、低い程度におけるその一つを例示することを意味する」（『時代別』）用法である。

上二句は、「妹」には減多なことでは逢うことが出来ない、せめて「妹が家」だけでも続けて見られればよいのに、の意なのである。ここに「妹が家」とあるのは自然な表現であろう。いずれにしろ仮想であるならば、「妹があたり」といった漠然とした見え方を希求するはずはないからである。その際、「妹が家」を見るために、自分の家が、妹の家近くの山上にあればよい、などと希求するだろうか。夙に『講義』に「わざわざ大島嶺に家居する如きことよりもその隣などに住まむ方よかるべきにあらずや。」という通りである。妹の家は余りに遠くて、逢うどころか、見えもし

ない、せめてここから見える山の上にもないものか、という方が、よほど自然に感ぜられる。下三句もやはり、「妹が家」が「大島の嶺」にあれば、と望むことを言うとするのが妥当である。モがともに「家」に付いていることが、二つの「家」の同一性の証左となっていると言えよう。

ならば異伝の方はどうなるのだろうか。異伝では、見ることが望まれているのは、最初から「妹があたり」である。第二句「継ぎても見むに」は、モの位置から見ても、「妹があたり」を、せめて続けて見るために、の意と理解される。つまり異伝は、遠く見えるはずの「妹があたり」が、ここからではよく見えない。せめて大島の嶺に自分の家があれば、そこから続けて見えるだろうに、といった歌だと解釈されるのである。

しかしこの解釈によれば、「大和なる大島の嶺に」に窺われる二人の間の距離、或いは隔絶の状況とは一致しなくなるだろう。それは、この異伝が、実際の作歌の場からすれば、やや不自然さを含んだ歌になっているのだと見るべきではあるまいか。この異伝の成立事情は判然としない。しかしおそらくは伝承の過程で、「妹が家」が山の上にあったら、という本文歌の特異な発想が、「妹があたり」という「国見的望郷歌」の類型に吸収される形で、失われてしまったものと推測される。^{注29}二人が国を異にして住ん

でいるという、「大和なる」という表現の本来の意義も、それとともに忘れられてしまったものと思われる。

五

天智歌の本文は、異伝とは異なる二段構成を持つ。せめて「妹が家」を続けて見られれば、という仮想を、そのために「大島の嶺」に「妹が家」があればよいのに、という空想によってたたみかけるのである。かかる主題——説明の反復形式は、歌謡的な口誦性が、鎌足の「安見児」の歌（九五、前掲）などと同じく、この歌にも濃厚なことを示すだろう。

この歌の場合、反実仮想を反復することが、その嘆きの深さの表現になっている。天智にすれば、鏡王女を訪れ得ないことは致し方ないことである。それを前提として、せめて妹の家が見えるところにあればよいのに、という仮想を繰り返すのである。

しかし、考えてみれば、相手の家が山の上になればよい、などというのは、相当に突飛な空想である。見方を換えれば、それは、遠く隔たつてある現状を、相手の家が遠すぎるのだと言わんばかりに、身勝手に嘆いているに過ぎない、とも見えるのではないか。その反実仮想の繰り返しだが、女の立場からは、かえって大仰で空疎な文言ととりなされてしまう。鏡王女歌の「ひかえめ」で「つ

つましい」のは、それ自体が、天智の派手な歌い振りに対する反発となつていふと言えらる。先に「マシ―益サメ」という変換を想定してみたのも、鏡王女が、そうした受け取り方をしたのではないかと考えるからである。^{注30}

橋本氏の言うように、鏡王女は、待つことしか出来ない女の嘆きを歌っている。待つ女にとっては、男の訪れがすべてであった。それが無い限りは、思ひはひそかに「益し」てゆく他はない。その思いに較べれば、早々と訪れることを断念して、相手の家が見られたら少しは慰むのに、などという男の思ひは物の数でない、と鏡王女は歌うのである。

天智・鏡王女の贈答歌は、ともに口誦歌のものと見られる特徴を備えており、他の初期万葉歌や記紀歌謡とも共通する要素を持っている。しかし二首は、それぞれの発想においても、対応の仕方においても、決して類型に埋没しない機知をもって成り立つ歌であった。万葉の相聞歌が、類型性を持つとともに、出発点で既にかかる突出した質を持つ歌を含んでいることは、今後問題になされるべき事柄だと考える。

注

注1 「天智天皇と鏡王女の歌」『国学院雑誌』S 62・2

注2

武田「全註釈」に、「秋山ノ樹ノ下ガクリ逝クというのは、単に水の説明だけで、益スということには関係のないのも、古歌らしい」とあるのは、この見方と軌を一にする。

注3

伊藤博「序詞の表現性」(『萬葉集の表現と方法』下、S 51)の用語による。

注4

無論、「朝露の吾が身」(11・二六九一)、「神さびて巖に生ふる松が根の君が心は忘れかねつも」(12・三〇四七)といった例は存在する。

注5

「鏡王女の歌二首」『初期万葉』S 54

注6

「秋山の樹の下隠り逝く水」『解釈』S 44・1

注7

「国見の望郷歌とその展開」『古代歌謡論』S 40

注8

注1論文。

注9

『全註釈』に、「天皇の御製が大島の嶺を云われているので、それに引かれて、その住むべき里の景を叙し、それを以て序として

注10

この歌に関して、「さ寝すにはとても生きていられそうにありません」(新編全集)という見方と、「生きていられないのは相手であるかのように歌って相手のからかいに応じ、親愛の情を述べたもの」(集成)という見方とがある。かかる序詞のあり方は、後者の蓋然性が高いことを示すのではない。

注11

「巻二の贈答歌」『万葉集を学ぶ』2、S 52

注12

男の歌のあげあしを取る「女歌」という理解は、はやく折口信夫「額田女王」(S 10、『全集』9所収)に見える。

注13

「相聞歌の様式」『論集上代文学』9、S 54・6

注14

『全註』は、「並行的に近似した感情を歌いあげている」から「奉和」という題詞を持つているのだとしているが、この点は、相手が天智であるが故であるという説明も出来る。藤原夫人の天武への「奉和歌」(2・一〇四)は、反発的に応じている。

注15

橋本氏は、「見る」ことを願望する天智歌の「願」に対して、序詞の「秋山の木の下隠り行く水の」が「隠」なる態度を表わす、という「贈歌志向性」をも説かれているが、必ずしも説得的とはいえない。

- 注16 「女歌の本性」「古代和歌史論」H2
- 注17 土橋寛「序詞の概念とその源流」「古代歌謡論」S45
- 注18 土橋寛『古代歌謡全注釈』古事記篇、S47
- 注19 「記紀歌謡について」帝塚山学院大学『日本文学研究』15、S59・2
- 注20 A説：『講義』、窪田『評釈』、『注釈』、『私注』、『全注』、大系、全集、講談社文庫、青木注1論文など
B説：『全注釈』、集成、寺川注6論文、橋本注11論文など
- 注21 全集（新編も）は、近江遷都（天智六年）前後の鎌足五五歳頃の作かとしている。しかし『興福寺縁起』（藤原良世撰、九〇〇年）によれば、天智称制二年十月、「鏡女王」が既に鏡足の「嫡室」になっている。
- 注22 沢瀉久孝『大島嶺』攷（『万葉古径』三、S28）による。なおA説をとる『全注』は、「近江遷都後に、大和の山々を望見しうる場所において詠まれたものとしても鑑賞しうるから」そのように限定出来ないとしている。しかし「継ぎて見ましを」の表現からすれば、A説を取る場合、「大島の嶺」を常時望む場所に住んでいるとするのが穏当ではあるまいか。
- 注23 「家もあらましを」と『家居らましを』『万葉古径』一、S16
- 注24 「万葉解釈におけるアキレスの踵」『万葉』34、S35・1
- 注25 「古代歌謡の様式」注17書所収
- 注26 『講義』に「高嶺の上にある家ならば、遠くても望みうべきが故にかくのたまへるなり。」と言う。
- 注27 「大和なる大島の嶺」が何を指すかはなお不明だが、「明石の門より倭島見ゆ」（3・二五五、人麻呂）、「千重に隠りぬ山跡嶋根は」（3・三〇三、同）などもあるので、信貴・生駒山の一峰と見る『注釈』以下の説に従っておく。また作歌時期、二人の位置関係なども『注釈』に従う。
- 注28 なお全集（新編も）は、結句を、「鏡王女の家がありさえすればいいのに」としている。しかし全集のモの解からすれば、上句同様、「せめて家があればよいのに」の意でなければなるまい。
- 注29 後世の享受の様相からも、異伝の発想が、広く受け入れられてい

注30 たことがわかる。『古今六帖』『玉葉集』『新千載集』いずれも「妹があたり」で、特に後の二書では、二段構成を取らず、結句は「家居」になっている（『注釈』の調査による）。

こうした関係も、異伝では成り立たない。これも伝承中に見失われたものと考ええる。

〔付記〕

本稿は、一九九五年六月七日、本学における新任講演の原稿の一部に加筆したものである。講演では、「国見の望郷歌」についても述べたが、これについては次号に譲りたい。また「万葉有志研究会」の皆様にご助言を賜った。記して感謝申し上げる。

（てつ） まさひろ 本学助教授